「原雨城」の世界

―杜鵑を中心として―

六回生　森上芳好

一、雨城の小伝

熊本市から北へ約三十キロ、山鹿温泉を通り抜けると、小高い山々が見えてくる。その一つに竜王山と呼ばれる松林に蔽われた小さな丘陵がある。その麓・舞鶴渓流のほとり、山鹿市杉、ここが原雨城の生誕の地である。雨城の系図によると、原家は「近江源氏の支族、馬渕孫七郎信茂より出ず……宝永正徳の頃一族肥後細川候に仕官し肥後に移りて、山鹿郷小原に住す。……その後御総庄屋となり……」とあり、山鹿の郷では、かなり格式のある家柄であったようだ。現在は当時の姿はないが、年老達の間では原屋敷と呼ばれている。彼はその地から鹿本中学校（現在の鹿本高校）を経て、熊本師範の第二回生として入学、同窓に宗不旱がいた。

卒業後、外地に渡り、朝鮮（現韓国）では校長を務め、帰国後、京都に居を得てからは学校長として又、会社の指導者として活躍する。しかし南画に対する夢が捨てきれず、田能村直入に師事して南画の主流を学び、師亡きあとは、大阪の南画の泰斗、姫島竹外の門に入った。しかし進歩的な性格は、これまでの描法に満足できず、独自の「南京以文派」を創始するに至った。京阪にあること四十年、その間、描かれたものは、山水、人物、花鳥獣など独自の構想描写による異色の画趣は、当時の京阪美術界の認めるところで、大東洋絵画展に第一等の受賞の栄に浴したのを始め、多くの画展に入賞し、時には審査の任にあたる等自派の権威を十分発揮した。雨城は又詩人でもあった。早くから詩文を好み、漢詩は京都の詩人・福田静処、大阪の詩家、春名栗城に学んだ。彼の漢詩は、賛詩體とでも言うような、独自の韻文と平易な漢字を主として面倒な平仄等はつとめて用いず、だれにでもわかる漢詩を願ったようで、自作の画に、自作の詩を題すること、これが彼の願いでもあった。

フランスへ留学し、新しい画風の開拓研究に努め、北米を経由して帰国の途上、船上より遥か雲の上にそびえたつ富士の雲峰を望んで、その雄姿に感動、「帰帆太平洋上富岳を望んで感あり」の詩と、その雄々しき富士の姿を描いた画は、彼の代表作である。

第二次世界大戦が激しくなるや、戦禍を避けて帰郷し、菊

大阪の南画の泰斗、姫島竹外の門に入った。しかし進歩的池川のほとり、山鹿市大官神社に隣接して住居を定め、堂号を「以文山荘」と稱した。終日清淡な画室に独りとじこもり興到れば、一気に画筆をとって、山水を画き飽きれば詩集を繙どいて、詩詞の流麗さにあこがれた。戦後門弟の強い上洛を請う声にも耳を傾けず、晴耕雨読の晩年を過した。

その雨城の詩を読むと、非常に多く「杜鵑」を見ることができる。

漢詩を読むと、詩情は詩語によって支えられているし、詩語は詩情によって色づけされている。即ち相互作用があると考えられる。

鳥の中でも日本名、「ほととぎす」と呼ばれる鳥が雨城の漢詩の中でどうとらえられているか。更に中国人では又その漢詩を学んだ日本人では、とたどり、わずかな資料を手がかりに、雨城の詩風を考察してみたいと考える。

二、漢詩の中の「杜鵑」考

(一)、原　雨城の場合

聴杜鵑

①嫩緑封庭雨漸晴　槐蔭滴処茗煙軽
何来夏信控詩袖　聞得啼鵑第一声

②庭院幽々雨未晴　淡雲低地悩吟情
夢中探得推敲句　眠覚新鵑第一声

第二次世界大戦が激しくなるや、戦禍を避けて帰郷し、葉

③庭院蕭條雨漸晴　湿雲低地碧苔生
喰心探得夢中句　賦到新鵑第一声

以上の三首は、詩趣が似ている。杜鵑の第一声であり、今期、初めての声である。夏の季節の到来であり、他に先がけての、夏の感知であり、喜びである。その喜びは歓声をあげるかのような詩情である。詩人の心をとらえて詩句の成立を得た瞬時の歓喜である。これは、雨城独自の領域を思わせるのである。

④卜居山角避塵気　冷夢閑窓苔気薫
杜宇一斜掠抄去　声々啼破暮天雲

⑤出国春秋幾去来　又看庭院早涼回
杜鵑啼破露亭夕　想起家山鶴水隈

④⑤では、「啼き破る暮天の雲」「啼き破る露亭の夕」と、ともに不透明な世界におこる亀烈であり、その衝動を伴なった杜鵑の声である。「啼き破る」の語の設定では、一段の迫力を備え、いっそうの清涼感を伝えてくる。「啼き破る」は、雨城の造語ではないかと考える。

⑥居卜郊南遠世縁　仰看新樹翠始煙
春風吹去杳無信　満地清涼啼杜鵑

清涼感としては、この詩の「満地の清涼」が示す通り、もっとも鮮やかなものとなっている。そしてその清涼さが杜鵑を啼かすかと思わせる語順をとっている。雨城自身は、結句を「杜鵑啼く」と読ませているが、語順からすれば、

「啼く杜鵑」或は「杜鵑を啼かす」が的を得ているが、雨城の心は「啼く杜鵑」又は、「杜鵑を啼かす」であったはずであり、この語順は作品の中でもただ一つである。

⑦落托江湖二十年　客遊猶未賦帰田
杜鵑斜掠抄梢去　啼血一声過暮天

⑧雨後夏山煙霞晴　杜鵑叫血幾声々
有人客舎空叉手　勿惹孤心万里情

⑦⑧では詩情としては、郷愁の点で共通しており、資料⑤もその類である。⑤では「啼き破る」⑦では「啼血」⑧では「血に叫んで」と順次、痛切さが高揚してくる。啼き具合を具象化したのはこの三首であり、④をのぞいて郷愁というものに集中しているのは傾向として、李白や日本の他の詩人にも共通するものが、あるのではないだろうか。「血に啼いて」と「血に叫んで」とは、ともに血を入れて痛々しさを強めており、中でも「血に叫んで」の方が濃度が高いことは言うまでもないことである。「血に叫んで」は李白では「叫ぶ」として用いられ、日本の他の詩人（松口月城の石動丸）にも「血に啼いて」等の例はあるが、「血に叫んで」の熟語としての詩語は、雨城の造語ではないかと思われる。彼の郷愁の詩を見た場合、雨城の郷愁の中にはむしろ、「さわやかさ」「清涼感」といったものが感じられる。これは他の詩人とは異る点の一つと考える。

彼は郷里を離れ文人として、画人としての研鑽期の半ばにして戦火をのがれ、やむなく山鹿への疎開に至った事情、又若くして教職も退き、隠遁の身であった事などから、杜鵑の訪れは、むしろ友の到来のような感じさえあったのではないかと思う。だからこそ、杜鵑の訪れは、清涼感さえ感じさせるのではないだろうか。

⑨寓居郊北絶鹿縁　残月微風欲暁天
醒後猶刪夢中句　小窓擁枕聴新鵑

聞杜鵑

⑩節入梅天己亘旬　陰雲低地雨頻々
飽書独倚茅軒立　杜宇声中月一輪

竹林幽居聞杜鵑

⑪避嘈悠々楽半生　竹林幽居侶孤檠
無明無泊間烹茗　杜宇窓前月有声

⑨⑩⑪は、ともに月を配した点に共通している。⑨は詩情としては①②③に近いものであるが、それらは、月を配していない点で異っている。この詩も喜びの詩である。⑪は菊池三渓（後述）の考え方「残月杜鵑」の中の「人言声在月　吾疑月有声　月落声遷断　一川卯花明」の「月に声有り」を踏襲しているように思う。⑩の「声中月一輪」は「月に声有り」からの発想の転換で、その裏がえしであるような感じがする。

匂当内侍

⑫秋光遍照唐垣下　月下弾琴佳人姿
離情恋々偕老誓　天運無常幽明異
庵裡幽閑冥福祈　杜鵑一声残月高

吊弘處画伯令息

⑬泣刎残燈賦吊詩　由来人事奈難顚
春秋十七真如夢　杜宇一声不絶悲
田原坂懐古
⑭義魂一片報国情　事違志英傑末路
残月影昏杜鵑不啼　悲雨惨風撫古松

⑫⑬⑭は雨城詩集の中で雑の部に入れられている。⑫は昭和三十九年二月の作で、雨城自身、吟詠詩と記している。常に売名を好まず、恬淡たる人柄で世俗とある間隔を保ちながら、清暇に甘んじた生活を送っていた雨城も、敗戦による社会秩序の変革は、彼のもっとも憂いとするところであったようだ。彼の義弟の子、即ち甥と吟詠家「伊藤秀峰」との交宜が縁となり雨城と吟詠家達との出逢いが始まったのが、昭和三十年代の早々であったようだ。

そう考えて来ると、この作品も当然吟詠の為の詩で、月、離情、無常、幽明、等と、無常の詩にかけては、意外と周囲をかためて、「杜一声」とすんなりとおさめるのも、雨城の世界であると考える。

⑬は弔詞である。「吊」は弔と同じ意味に使われている。杜鵑を詩語として用いたのは、この詩だけである。杜鵑一声を主情的にとらえ「悲しみをたず」と表現したのは珍らしい。⑭は昭和三十七年五月の作で、彼自身民謡詩と記している。杜鵑とのかかわり方が、丹心を思わせる「義魂」とむすばれ、悲雨、惨風等、荒涼たる悲痛さは、雨城一世の力作である。晩年に近くして作ったものであり、彼の最愛の詩でもあった。今でも彼の家の床にはこの詩がかけてある。

ここで留意しなければならないことは「残月影暗うして」と「杜鵑啼かず」の結合である。月を消し去る時は杜鵑も啼かせない。これが悲痛の極地であり、杜鵑を啼かせる時は、彼の詩情はまだ救われている感があるのである。

以上資料を一読して来たが、①～⑪までは世俗から退いての画人、詩人としての、即ち文人としての生活の中で生まれたものである。「塵気を避け」「世俗を遠さけ」「落托江湖」「塵縁を絶ち」「嘈を避け」等の詩句がその事情を語っている。そのような語がなくても、趣きから見ると、その領域内であるのは容易にうかがえる。俗縁の外に住む者の杜鵑とのめぐり合いである。そのめぐりあいの喜び、楽しみ、そして郷愁でもある。杜鵑は同じく俗縁外のそして、雨城の友として当然雨城には喜び迎えられたのである。雨城は、杜鵑、鵑、杜宇の三種を用い、子規は用いていない。⑩⑪では表題では杜鵑を用い、詩句の中では杜宇を用い杜鵑の別名が杜宇であることを明示している。杜鵑を用いて歓喜を表現したのも、雨城の特異さであろう。

一方杜鵑で郷愁をうたって、伝統を踏まえながらも、杜鵑を啼かせないことによって表出された悲痛の極の世界は、これまた雨城の独自の世界でもある。

詩集では⑫⑬⑭が雑の部に入れられているので、のこりは十一首となる。それらは夏の部に入れられている。夏の部の作品が六十八首であるので、その中の十一首を杜鵑がしめている。この割合は実に大きい。そうしてみてみると、

雨城は杜鵑の愛好家であった…と言えるかもしれない。

(二)、李白の場合

それでは中国人は「ほととぎす」をどうとらえているだろうか。李白の詩を見てみることにする。

資料①聞王昌齢左遷竜標遙有比寄

揚花落盡子規啼　聞道龍標過五溪
我寄愁心與明月　隨風直到夜郎西

とあり、この詩では子規、愁心、明月の語に留意しておきたい。

②涇溪東亭寄鄭少府諤

我遊東亭不見君　沙上行将白鷺羣
白鷺行時散飛去　又如雪點青山雲
欲往涇溪不辞遠　龍門蹙波虎眼転
杜鵑花聞春已闌　帰向陵陽釣魚晩

「君を見ず」「遠きを辞せず」「杜鵑花」の組み合わせに注目しておく。

③宣城見杜鵑花

蜀国曽聞子規鳥　宣城還見杜鵑花
一叫一廻腸一断　三春三月憶三巴

とあり「子規鳥」「杜鵑花」「三巴を憶う」に留意しておきたい。

④奔亡道中五首　其五

淼淼望湖水　青青蘆葉斉
帰心落何處　日没大江西
歇馬傍春草　欲行遠道迷
誰忍子規鳥　連声向我啼

「帰心」「誰か忍びん」「子規鳥」に留意する。

約一千首と言われる李白の全詩の中から、以上の四首を関係あるものとして選び出した。李白の詩語の面から見ると、①の「子規の啼く」③の「子規の鳥」④の「子規の鳥」では、ほととぎすの鳥は全て、子規で表わされている。②の「杜鵑花」③の「杜鵑花」これは全て、つつじの花のことであり、③では「子規の鳥」と対語になっている。

次に詩情をみると、①は子規の啼き声からの王昌齢への愁心であり、②は鄭諤に寄せる愁心を杜鵑花による高めであり、④は子規の連声による帰心の高揚であり、「誰か忍びん」まで高められていくのである。

③は屈曲を表面に提示してみせている。起句と承句は対句関係にあり、眼前では異郷で杜鵑の花を見て、郷里の蜀では以前に子規の鳥の声を耳にしたと語っている。ここでは杜鵑花から子規の鳥へと線がたどられている。杜鵑花から、その花をのぞけば、杜鵑となり子規の別名となる。従って杜鵑花から杜鵑、そして子規の鳥へと展開して郷愁と連繋していくのであろうと考えられる。

古来中国では、「杜鵑花発杜鵑叫、鳥臼花生鳥臼啼」と言う言葉があり、杜鵑と杜鵑花は深い縁があったものとして用いられているようである。①と②は人への愁心であり、③と④は郷里への愁心であると見ることが出来る。即ち子規の鳥と杜鵑の花との型を守り、愁心の主題を詠じたのである。ただ①では更に「月」と「子規」の組み合わせがあ

ることに留意したい。

①と②の友人への愁心にくらべて③④の郷里への愁心では「腸一断」「誰か忍びん」等の痛切な語が、表出されているのにも留意しておきたい。

㈢、他の日本詩人の場合

次に中国の漢詩を学んできた日本人の漢詩では、ほとんどぎすと呼ばれる鳥が、どんな色合いをもって用いられているか考察してみよう。ただし、日本漢詩(上)(下)（明治書院）と吟剣詩舞道漢詩集(上)(下)（日本吟剣詩舞振興会編）新編和漢名詩選（みずほ出版）以上の本の中に限ってその中から選んでみた。

資料①　残月杜鵑　菊池　三渓

人言声在月　吾疑月有声
月落声遷断　一川卯花明

①では「残月」「杜鵑の声」に留意しておく。

資料②　舟中聞子規　城野　静軒

八幡山崎春欲暮　杜鵑啼血落花流
一声在月一声水　声裡離人半夜舟

「杜鵑」「月」「離人」に留意したい。

資料③聞杜鵑　森　春濤

水精花上月依微　著意聴時聞得稀
但是空山人寝後　雲埋老樹一声飛

「月」「杜鵑」に留意しておきたい。

資料④棄児行　作者不詳

斯身飢斯児不育　斯児不棄斯身飢
捨是邪不捨非邪　人聞恩愛斯心迷
哀愛不禁無情涙　復弄児顔多苦思
児兮無命伴黄泉　児兮有命斯心知
焦心頼属良家枚　欲去不忍別離悲
橋畔忍驚行人語　残月一声杜鵑啼

④では「残月」「杜鵑」「無常」「別離」に留意したい。尚この作者については　雪井竜雄と言う説もあるが定かではない。

資料⑤乱後出京到江州水口　一条　覚恵

憶得三生石上縁　一庵風雨夜無眠
今朝更下山前路　老樹雲深哭杜鵑

「雲深くして」「杜鵑」「哭く」に留意したい。

資料⑥舟至由良港　吉村　黄庵

回首蒼茫浪連城　蓬窓又聴杜鵑声
丹心一片人知否　不夢家郷夢帝京

「杜鵑」「家郷」「丹心」に留意しておく。

資料⑦一谷懐古　梁川　星巌

二十余春夢一空　豪華吹散海暝風
山排殺気参差出　潮迸冤声日夜東
憶昔満官悲去鷁　欲将往事問飛鴻
爛斑剰見英雄血　塹樹鵑啼朶朶紅

「血」「鵑」「紅」に留意しておく。

資料⑧石動丸　松口　月城

花有雨兮月有雲　悲風亦吹苅萱関
繁氏翻然入仏道　出家遁世高野山

故郷遺児石動丸　可憐当年十四才
伴母雲山尋父来　人間誰耐比恩愛
霊峰巍嵯聳雲間　仰之一夜喜不眠
悲哉女人禁制処　残母登来伽藍辺
訪西尋東不得父　夕陽沈山已蒼然
無明橋畔過僧侶　右手花桶左珠数
慇懃撫肩情殊深　比僧或莫是吾父
縋袖欲語無限思　道心聴之扶肺腑
嗟仏道是耶恩愛非　熱涙滂沱落法衣
忽聴暮鐘無常響　杜鵑一声啼血飛

⑧では「月」「誰か耐えん」「肺腑を扶らる」「熱涙」「無常の響」「杜鵑」「血に啼いて」等に留意したい。

以上の資料をもとにしてみてみると、資料①②③④に共通するものは、「月」と「杜鵑」との組み合わせである。しかしもう少し細にみてみると、①と②は「声月に在り」の系統を踏んでおり、①は「月に声有り」と発展し②は「一声は水」と発展する。その意趣の発想の奇抜さが、生命であろうし日本的なものと考える。②では更に表題では「子規」と言い、詩中では杜鵑を用いて、子規と杜鵑のつながりを明示している。

詩情の面から見ると資料①は自然の風致であり、②では一声を聞き得た得意さであろう。老樹を配したのは、詩に風格を与えたことと考えられる。これ等は日本独自の世界であるように思う。資料②は離人の語で自分の身の上を明かすところからすれば、郷愁であろう。郷愁であるとすると、李白の詩の中でも郷愁のものに限り、一段と痛切な響きの語が用意されていた。「誰か忍びん」「腸一断」などがあったが「血に啼いて」も同じ線上をたどるような気がする。資料④も別離の情の痛々しさであり、生と死の別離であり、無情の世界である。資料⑤は「雲深くして」とあり、月とはまさに逆である。しかし②と④の離人、別離と同じく詩情としては郷里からの離別である。「更に下る」が尚郷里から遠ざかることを意味すると思われる。

杜鵑に「啼く」を「哭く」と言う字を当てたのは独得なものと思われる。⑥⑦では杜鵑は「丹心」「血」「紅」と結びつけられている。杜鵑花はさつき又は、つつじ類と言われているが、杜鵑からまっ赤な杜鵑花を暗にたどっての、丹、血、紅でありそして丹心の語が示す通り忠義へと昇華されている。資料⑧では李白が郷愁に見せる「腸一断」「誰か忍びん」を思わせるもの「肺腑を扶る」「誰か耐えん」があり、更に無常の響きと杜鵑の一声が組みこまれ血に啼いてが組みこまれている。

②にあった「血に啼く」は白楽天の琵琶引に「其の間旦暮に何物をか聞く、杜鵑血に啼き猿哀鳴す」と又、李山甫の「子規の啼くを聞く詩」には「断腸故郷を思い、啼血芳枝に濺ぐ」とあり、日本の独想ではない。しかし詩の長短にも大いにかかわるだろうが、無情の情趣の領域においては日本人の独意さが見られるようである。

三、まとめ

以上杜鵑を中心として、原雨城、中国の李白、日本人の詩人達の作品のそれぞれについて考察してきたが、「杜鵑」についての考察を更に深めてみると、杜鵑は杜宇、子規、蜀魂、帝魂、不如帰等、多種の異名を誇るもので、それらはすでに中国古典の中に見い出される。

「蜀之後主、名杜宇、号望帝、讓位亡靈　望帝自逃　後欲復位不得　死為鵑　毎春月間　昼夜悲鳴　蜀人聞之曰　我望帝魂也。」この伝説の本命は何かと言えば望帝の未練の魂であろう。我が郷里へ帰れないものの、異地においての帰心である。動物昔話は伝える、「弟を疑って腹を裂いて確かめ無実の罪に弟を殺した兄が、杜鵑になって弟恋しいと鳴いた。」とか。これまた人への郷愁であろう。

さて、不如帰である。〔蜀王本紀〕には「為蜀望帝淫其臣鱉靈妻　乃禅位亡去　時此鳥鳴　故蜀人見杜鵑鳴而悲望帝其鳴如曰不如帰去。」とあり不如帰去（ブールクイチュイ）は、まさに鳴き声であろう。その鳴き声が杜鵑の異名となったのは、多くの詩の中にその例を見る。その不如帰去は、帰るのが何よりだ、と言う帰心、郷愁の表白であろう。とすると杜鵑が郷愁に多くその詩材となってきたのは当然のこととして納得がいく。少なくともこのような伝説が民間に育ち記録されている事実は、後世に大きな方向づけの力を与えたのは当然であろう。

李白においても日本の詩人達においても、その伝統的なものの素地に立脚して郷愁、帰心にその切なるものが多いのである。

原雨城の場合は、むしろ別の要素の色彩を強めた感がある。それでもやはりこの伝説の素地を無視出来ない。その理由は「望帝禅位於開明、升西山隠焉。」の升西山隠焉の要素である。即ち隠遁の身である。杜鵑と杜宇は、その杜が示す通り山中の、ひいては脱俗の境地を意味するのである。原雨城は、脱俗の友として杜鵑を暖かく迎えている。中国の伝説中の望帝を迎えるかのような謙虚な姿がそこには、あるようである。他の詩人は俗界の煩悩との絆として杜鵑をとらえるのに、雨城は非俗界から、非俗界への絆としてとらえるのである。絶対的ではないかもしれないが、その傾向が強く認められることは歪めない。